

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 (教育学)	氏名	國清 あやか
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p>図画工作科の鑑賞教育における想像力を育む学習指導の開発 —探究的な対話と模写を取り入れた絵画鑑賞を通して—</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教 授 内田 雅三            審査委員 教 授 井上 弥            審査委員 教 授 権藤 敦子            審査委員 准教授 中村 和世</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本研究は、小学校図画工作科において、想像力を育むために有効な絵画鑑賞の学習指導法を開発することを目的としている。提案された学習指導法は、①美術作家の創造的思考のプロセスを児童に追体験させる模写を取り入れること、②本質的な問いを中心に据えた探究的な対話型鑑賞を行うことを特徴としている。広島県公立小学校4校の協力のもと、平成24年2月から平成27年12月にかけてアクション・リサーチを実施し、開発された学習指導法の有効性を実証的に検証している。</p> <p>序章では、図画工作・美術科教育における想像力に関わる実践及び理論に関する先行研究を概観し、本研究の独自性ととともに、図画工作・美術科教育の研究領域における位置づけを明確化している。これまでの想像力に関する研究では、創作活動を対象としたものが中心的であり、鑑賞活動を対象とした学習指導の開発を進める必要性が述べられている。</p> <p>第1章では、模写を取り入れた学習指導、対話型鑑賞をキーワードに、先行研究のレビューが行われている。図画工作・美術科教育において鑑賞領域の拡充を推進した DBAE (Discipline-Based Art Education) に関する文献を整理し、DBAE が提案する専門家の探究と児童の探究とを結び付ける学習理論の実践可能性について考察している。また、国内外における想像力に関する実践研究を整理し、①想像力向上を測るための評価指標が確立されていないこと、②想像力育成を図る学習指導法が鑑賞領域に関しては未発達であることを指摘している。加えて、美術作家の創作における模写の意味を踏まえて、模写が美術による人格形成において持つ教育的意義を考察している。</p> <p>第2章では、ヴィゴツキーの想像力の理論をベースに、小学校低学年、中学年、高学年の発達段階に応じて児童の想像力の働きがどのように質的に変化するかについて考察し、質的变化を促進するための絵画鑑賞の学習原理を明確化している。</p> <p>研究デザインに関する第3章では、①問題の確定、②予備調査、③仮説の設定、④計画の実践、⑤検証、⑥報告とリフレクションのサイクルによって進められるアクション・リサーチを本研究で用いる必要性が示され、予備研究、アクション・リサーチ1・2から構成される研究手順とともに、本研究の目的に応じたプレテスト・ポストテスト、プロトコル分析が考案され、それらを用いたデータ収集・分析方法が提示されている。</p>			

第4章では、ヴィゴツキーの想像力に関する理論、H・ブラウディの美的教育論、研究者が広島県公立小学校4校において収集したデータを基に、演繹的・帰納的な方法で、想像力向上を測るための評価指標が開発されている。開発に際しては、佐藤の質的データ分析法を用いて概念的カテゴリーを生成し、5段階の「想像的特質の知覚レベル」と8段階の「造形的特質の知覚レベル」から構成される評価指標を作成している。

第5章では、広島大学附属小学校5年生を対象に実施した予備研究、同校1・3・6年生を対象としたアクション・リサーチ1、広島県公立小学校に勤務する図画工作科のエキスパート教員3名の協力を得て1・3・6年生を対象に実施したアクション・リサーチ2を通して開発した学習指導の具体が記述されるとともに、プレテスト・ポストテスト、プロトコル分析、児童のワークシートの内容分析の結果から学習指導の効果について考察している。開発した評価指標を用いて、児童の想像力の向上を事前事後の平均値比較によって測定した結果、全学年に関して、授業で扱った絵画作品を対象とした場合は効果が現れたが、別の作品を対象としたプレテスト・ポストテストにおいては効果に有意な差が見られなかったという結果が報告されている。

アクション・リサーチの結果を踏まえて、第6章では、累積的な学習を重ねることによって授業で扱った以外の絵画作品の鑑賞においても有効に働く想像力が高められる可能性が論じられるほか、本研究を通して明らかになった児童の絵画鑑賞における想像力の発達の特徴が示されている。低学年の段階では、生活経験を再現的に思い起こしながら作品に描かれている対象を主観的に捉え想像する傾向があり、中学年では、作品に描かれた対象のみでなく色や形などの大きな特徴を捉え、作品に感情移入する傾向がある。高学年では、色の明暗や形の大小、対比などによる構成の特徴や表現様式を捉えながら、作家の精神世界や作品の主題を想像するレベルに移行する。以上の段階ごとの特徴を踏まえて今後の学習指導の改善の方向性が考察されている。

本論文は、図画工作・美術科教育の研究として以下の2点から評価できる。

1点目は、児童の想像力向上を図る絵画鑑賞の学習指導法を累積的なアクション・リサーチによって開発し、実証的な検証を通して、作家の創造的思考を体験させる模写、並びに、本質的な問いを中心に据えた対話型鑑賞を取り入れた学習指導法は、限定的ではあるが、児童の想像力を高めるために効果があることを示したことである。

2点目は、絵画鑑賞における小学校低学年、中学年、高学年の児童の想像力発達の特徴について、実証的研究から明らかにし、図画工作科教育における絵画鑑賞の学習指導に必要とされる想像力向上を測るための評価指標を開発したことである。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成 29年 4月 24日